

基調講演

論証を道具に議論を作る

福澤 一吉（早稲田大学）

「論証」と言うと何やら難しそうな感じがするかもしれませんが。しかし、私たちの思いや、考えは殆どすべて論証からなっており、皆さんもすでに論証を日常的に使っているのです。そしてこの論証は小中高教育で重視されつつある議論力、討論力、説明力などの力を付ける際、最も重要な基盤となるものです。

簡単に論証を定義しておきますと、論証とは「ある主張（結論）を、それを支持する理由と共に示すこと」となります。例えば、太郎が「昨日のランチはラーメンだった。だから、今日のランチはカレーにしよう」と言ったとします。太郎は「昨日のランチがラーメンだった」という理由をもとに、「今日のランチはカレーにしよう」という結論をだしているの、論証していることとなります。ここでのポイントは「昨日のランチはラーメンだった」という理由の内容が「事実である」ということです。そして、このように事実が理由として使われるとき、この理由を根拠と呼んでおきます。

次に、花子が「どうして、昨日のランチがラーメンだと、今日はカレーなの？」と太郎に尋ねたとしましょう。この問いかけは「昨日食べたランチがラーメンだった」という根拠（事実）を提示すると、どうして「今日のランチはカレーだ」という結論が導けるのか、という内容の質問です。この質問に対して太郎は「なぜなら、毎日同じものを食べるべきではないからだ」と答えたとしましょう。先ほど「昨日のランチはラーメンだった」という理由は事実であり、それを根拠といいましたが、この「毎日同じものを食べるべきではない」という理由の内容は事実ではなく、太郎が考えた仮定です。このように理由の内容が仮定であるとき、それを論拠といいます。ここまでに登場した根拠、結論、論拠をつなぐと、太郎の論証は「昨日のランチはラーメンだった（根拠：事実）。だから、今日のランチはカレーにしよう（主張）。なぜなら、毎日同じものを食べるべきではないからだ（論拠：仮定）」となります。

ここで注意したいのは私たちがよりフォーマルに議論、討論、説明する場合には主張（結論）を支える理由に事実（根拠）と仮定（論拠）を組み合わせている点であり、特に論拠（仮定）が論証において重要な役割をするということです。花子の太郎に対する質問に答えることで論証ははじめて完結するのです。

一般的な議論、討論、説明などには根拠と結論（主張）は登場するのですが、論拠には言及されないか、伏せられています。それでいて論拠は議論、討論において重要な役割を担っている。これほど重要なものがどうして議論、討論にでてこないのでしょうか？その最も有力な理由は、私たちが「議論、討論などをする際、それがあある構造（論証）とルールをもっていること、そして、その構造とルールに照らし合わせながら話し合いする時、それがはじめて議論になること」を教育されないまま大人になっていくからです。

本夏季講座では分析哲学者 S. Toulmin の論証モデルを紹介し、議論、討論、説明が一定のルールに従う必要があることを演習しながら理解していきます。それぞれの学年に合わせた論証教育教材の在り方についても紹介します。同時に、論証理解が文章のクリティカル・リーディングや、クリティカル・ライティングにも深く関与することにも触れます。

参考図書

『議論の技法』 S. Toulmin 著 戸田山和久、福澤一吉訳 東京図書

『議論のレッスン』 福澤一吉著、NHK生活人新書

文章を論理で読み解くための『クリティカル・リーディング』

福澤一吉著 NHK新書

『論理的に読む技術』 ソフトバンククリエイティブ出版

『論理トレーニング』 野矢茂樹著 産業図書

講義 1

教育とことば：ことばによって失われたものをことばによって取り戻す

鈴木 宏昭（青山学院大学）

ことばにはさまざまな働きがあるが、記憶、学習、推論、判断を行うときに果たす役割はとても大きい。言葉にすること、シンボルにすることによって、事態を簡略化することができ、言語（だけ）が持つネットワークを利用することでさまざまな連想や推論ができ、今後の類似の場面に過去の経験を生かすことが可能になる。このようにことばは多くのことを私たちに与えてくれた。

たとえば次のような典型的な三段論法を考えてみよう。「綿は暑く乾燥した地域で生産される（大前提）」、「イギリスは寒くて湿気が多い（小前提）」から、「イギリスでは綿花は栽培されない」という結論が導かれる。「暑い」と「寒い」、「乾燥した」と「湿気が多い」の背反関係や、各々の概念（名辞）の参照の包含関係などの言語的な関係性がなければ、こうした推論を行うことはできない。その意味で言語は論理の基本となっている。

しかしことばは同様の仕組みによって事態を覆い隠すという側面も持っている。つまりことばにするから見えなくなる、ことばの世界で考えるから理解できない、ことばのネットワークによって誤った方向へ誘導されてしまうこともある。

先ほどの三段論法に戻ってみよう。むろん論理的に考えれば上記の前提からはイギリスでは綿は生産されない。しかし本当にイギリスでは綿花は栽培されないのだろうか。これは事実的な問題として捉えた場合にはかなり疑問が残る結論だろう。たとえばグレートブリテン島だけがイギリスではないわけだし、イギリスのどこかの研究室で実験的に綿花を栽培しているかもしれない。また砂漠は暑くて乾燥しているが綿花はおそらく栽培できな

いだろう。このようにことばは現実の持つ多くの可能性を捨象してしまうこともある。

ことばが持つこうした負の側面を何によって克服するかは教育上重要な課題となるだろう。この課題を考えるときの重要なポイントは、ことばの理解はことばの世界だけで閉じているわけではないということである。ことばが語る状況、世界を自らのうちに再現できなければ、そのことばを理解したことにはならない。同じことはことばの産出についても言える。ことばで語りた世界を明確にイメージする、語りかける他者のいる世界を想像するなどがなければ、適切な文の産出は難しい。

ことばから状況を再構築すること、ことば化する前の豊かな世界を作り上げることのために、教師ができることについて参加者の皆さんとともに考えてみたい。

講義 2

児童文学を意味論的に読み解く—『注文の多い料理店』を例にして

西山 佑司

(東京言語研究所運営委員長／慶應義塾大学名誉教授)

児童文学に登場する単純な表現は、ことばの意味と解釈を考える上で貴重な材料を提供してくれます。子どもたちがいともたやすく内容を理解できる児童文学はかれらが頭のなかに備えている「言葉にかかわる装置」をさぐる上できわめて貴重なデータを提供してくれます。わたくしは、児童文学には、言語研究の豊かな材料が宝のように沢山あると考えています。ただし、児童文学を虚心坦懐に読み、素直に味わいさえすれば、誰でも、子どものコトバ能力が浮き彫りになってくる、というものではありません。良い魚を捕るためには素手ではなく、しっかりした適切な網を用意する必要があるのと同様、十分な理論的な枠組みを用意し、その理論という網をひっかけていかなければ、隠れた興味深い言語事実は露わになりません。この講義では、このことを具体的に示すために、誰でも知っている児童文学からひとつの有名なフレーズをとりだし、その意味と解釈にかかわる問題を一緒に考えてみたいと思います。

宮沢賢治の『注文の多い料理店』は数ある児童文学のなかでも最高傑作のひとつです。深い森のなかをさまよって空腹になっている2人の猟師がレンガ造りの立派な西洋料理店をみつけます。かれらが入った料理店には、(1)のような張り紙があり、それを(2)と解釈し、喜こんでいたところ、実際は(3)であり、恐ろしい目にあうという話です。

(1) 当店は注文の多い料理店です。

(2) 当店は、人気があって、そこに注文するひが多い料理店です。

(3) 当店は、客に対してあれこれ注文をつける料理店です。

この物語を読んだ子どもたちは、(1)という表現には、(2)と(3)の意味があり、曖昧であること、したがってコンテクスト次第では異なる解釈が可能であること、話し手が意図した解釈をかならずしも聞き手が捉えるわけではないこと、といった言語学的に重要な事実を物

語を通して自然に理解していくことでしょう。子どもたちは、これまで、言葉（日本語）を無意識に使ってきており、言葉はいわば空気みたいなものでその存在すら気付かないのが普通です。ところが、ひとたび宮沢賢治のこの物語の世界に引き込まれた子どもたちは、言葉について、「あれっ」と思って立ち止まって考えざるをなくなり、物語の進行とともに「言葉について考えることの面白さ」を知らず知らずのうちに体験するのです。その意味で、宮沢賢治のこの作品は児童文学の傑作であるばかりでなく、「言語学教材」としてもすばらしい作品とみなすことができると思います。

本講義では、そのことを詳しく説明いたします。まず、「注文の多い料理店」という表現を出発点にして、この表現がどうして曖昧になるのかという問題をじっくりと考えます。ここで、教師（大人）は、「この表現はしかじかの意味があり、曖昧なのだよ。覚えておきなさいね。」と子どもに頭から教えるのではなく、「そうだね、たしかにこの表現にはまったく異なる二つの意味があるんだね。ではなぜ曖昧と感じられるのだろうか、先生と一緒に考えてみよう」という風に、子どもの知的好奇心を育てる姿勢が必要です。重要なことは、これは単に「注文」や「注文する」という語が曖昧だというだけでは片付かない深い問題だということです。この問題を解決するためには、語の意味の気づき以外に、

- (i) 「青い空」と「空は青い」のあいだにある文法的な関係
- (ii) 「太郎の妹が2人いる」（存在文）と、「太郎は2人の妹がいる」（所有文）のあいだにある密接な意味関係
- (iii) 「窓が少ない部屋」と「(この)部屋は窓が少ない」のあいだにある密接な意味関係
- (iv) 「A新聞は広告が多い」には三つの異なる意味があること

といった、文の統語構造・意味構造にたいする気づきがきわめて重要であり、それらが一見単純に思われる「注文の多い料理店」という表現に複雑に投影されています。この投影された複雑な糸を1本、1本、子どもたちに気付かせるということはかれらの知的な好奇心を高めることに寄与するでしょう。

さらに、本講義では、実際の物語のなかでこの曖昧性がどのように除去され、解釈され、ことばが理解されていくのかという「発話解釈のメカニズム」にまで話を進めていきたいと思えます。この考察を通して、「ことばを理解する」ときに働いている人間の心のなかには、単に「当該の言語（日本語）を知っている」という能力だけではなく、それとは別種的能力、つまり、話し手が何を言わんとしているかを推論していく能力、すなわち、話し手の心を読む能力--「解釈能力」--が働いているという事実を子どもたちに気づかせることもできるでしょう。

なお、驚かれるかもしれませんが、実は、言語学的には、(1)という表現には(2)と(3)の二つの意味とは別にさらに5つの意味があり、この表現は結局、7通りに曖昧なのですが、本講義ではこの点も意味への気づきとの関係で浮き彫りにしていきたいと思えます。さらに、宮沢賢治のこの物語には、「注文の多い料理店」という表現以外にも、「ことば」、「意

味」、「思考」、「理解」について、はたと立ち止まって考えさせる興味深い表現がありますのでそれにも触れてみたいと思います。

この作品は有名ですので、英訳本もいくつかあります。それらの英訳本における英語は「注文の多い料理店」がもつ曖昧性をどこまで正しく反映しているだろうかという問題も時間があれば皆さんと一緒に考えてみたいと思います。

なお、本講義を受講される方は、『注文の多い料理店』の原作を（どのような形でも結構ですから）各自、用意していただければと思います。

講義 3

文字の連なりを言葉へ—伝わるための英語音声指導の実際

久保野りえ

（筑波大学附属中学校）

「気持ちを込めて音読しましょう。」これは英語の授業でも、国語の授業でも、よく言われることではないでしょうか。生徒もある程度そのつもりになって読んでいるのだと思います。しかし、聞いている側にはそれが伝わらないばかりか、外国語の場合、意味さえ伝わらないことも実はしばしばあります。テキストを見ずに聞いていると、何ということばを言ったのか、キャッチできないこともあります。その反面、すんなりわかるように話せる生徒も少数ながらいます。この差はどこから来るのでしょうか。単なる「発音の良さ」でしょうか。何が良いから、その生徒の英語は伝わるのか、「発音が良いから」だけでなく、教師はもう少し分析的に生徒に指導することが必要でしょう。

「書かれているテキストを、聞いて分かる英語音声にできる」ことは、外国語学習では、世間で言われている以上に非常に重要な意味があります。そのために私の教室では「気持ちを込めて」だけにとどまらず、具体的な指導を行います。本講義ではその音声指導の一端をお話したいと思います。

また、現在「英語の授業は英語で」と言われることに対して「英語で説明しても生徒にはわからない」という不安や不満を持っておられる方が少なくないことと思います。当然のことです。これに対する現実的で効果的な対処方法の鍵も、実はこの「意味の伝わる音声」という点にあると考えています。具体的な教材とともにその方法をご紹介しますと思います。